

TRIAL &

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

ERROR



【特集】アフガニスタン・非暴力運動

抑圧される社会で
JVCは何を代弁するのか

【報告】JVC国際協力コンサート終了

30年間
ボランティアが紡いできた
JVCコンサートついに終幕

【報告】第18回南北コリアと日本のともだち展

「子どもの絵」を媒介に
平和な東アジアを築くのは
「大人の仕事」

アフガニスタンで始まった非暴力の地域社会を目指す運動「ピース・アクション」の実践書である「ピース・ブックレット」を手にする村の校長先生。「教育こそが問題解決の鍵である」と熱弁してくれた。



ピースアクションが実践されている村の子どもたちが「平和」と書かれたサインを掲げる

葉です。大手メディアが取り上げない活動地の日常を我々が伝えていくということなのかもしれません。

パレスチナ出身の文学研究者エドワード・サイードはオリエンタリズムの議論の中で、「オリエントとはヨーロッパ人の頭でつくりだされたもの」であり、操作され、組み替えられたイメージだと指摘しました。

その議論は今の中東諸国を描く際にもあてはまり、私たちは自分たちで作り上げたイメージだけで世界をとらえているのかもしれない。例えば「対テロ」戦争以降、大手メディアは「紛争」、「テロ」、「暴力」というイメージで中東を語っています。

実際、紛争はあります。しかし、その中でも普通の生活を営む市井の人びと、平和を願う行動する人びとの姿は伝わってきません。「紛争」や「テロ」とレッテルを貼られてしまった、イラクやアフガニスタンでお会いしてきた多くの人びとは「排除された気持ちになる」、「世界はイスラムを正しく理解していない」と私に強く語りかけていました。

アフガニスタンで武器を取らない人がいる

紛争が何十年も続く中でも武器を一切取らずに非暴力の価値を信じ、人道支援活動に長年関わるアフガニスタン人のリーダーの方々と共に JVC と日本の他 NGO 団体は現地 CSO（市民社会組織）への研修支援をしてきました。正直、「そんな人がいるんだ」と初めは心から驚きました。「もし自分がアフガニスタン人で、親せきや知人が殺されても、武器を取らないでいられるか？」と自問すると、武器を取るかもしれない自分の弱さを考えてしまうからです。

ほんの一例ですが、JVC アフガニスタン事業でも、現地スタッフのサビラの発案により、平和の取り組みが行われています（次ページ参照）。暴力が解決手段だと信じる人も多いアフガニスタンの中で、このような取り組みに集う人々が出てきているのです。

JVC 活動地で起きているこれほど違う風景を見せるということが我々の役割なのかもしれません。



自らの手で平和を取り戻す！
JVCアフガニスタン事業 加藤 真希

アフガニスタンでは40年近くも紛争が続いている。

家族や知人を理不尽な死で失うことで「憎しみの連鎖」に囚われる者もいる。今生まれた赤ん坊も10数年後には武器を持ちうる。そのアフガニスタン人の中から、武器を捨てて平和を構築しようとの「ピース・アクション」運動が始まった。

加えて、その紛争で破壊された教育環境を取り戻す一環として「識字教育」も進行中だ。その2つの事業を説明したい。

(1) ピース・アクション

長引く紛争の影響を受けて

アフガニスタン。この国のイメージを挙げるとき、多くの人の頭にはまず「紛争」や「テロ」という言葉が浮かぶのではないだろうか。

確かに、1979年頃からのソ連侵攻、ソ連撤退後の後の激しい内

米軍の「誤爆」を受け、花嫁を含む何十名もの親族を失いました。彼は優しい人ですが、アメリカに対する深い怒りは隠しません。そのような経験をした人に対して、「武器を置いて平和を語ろう」と私たちは簡単に言えるでしょうか？

武力は解決法となりうるか

それでも、「憎しみの連鎖を断たなければ戦争は終わらない」と、社会に蔓延する武器と暴力に危機感を強めた現地スタッフのサビルラから家庭や地域での非暴力の学び合いが提案され、JVCは17年度から、ナンガルハル県クズ・クナル郡で平和構築の活動を開始しました。

サビルラは、幼少期にアフガン難民としてパキスタンに逃れ、祖国の内戦時代に青年期を過ごしました。当時の彼は力がモノを言うと感じ、銃を携帯し、護衛を付け、武装勢力と接触もしました。

しかし、非武装で米軍に抗議し、人々と強い信頼関係を構築することで、確かな治安情報を得て、地域の



アフガニスタン東部に位置するナンガルハル県は、パキスタンとの国境を有する。近年もタリバンや「IS」による攻撃が頻発し治安状況は非常に厳しい。JVCの事務所はジャララバードに所在

有力者の保護や住民からのサポートを受けるといった安全確保を実現するJVCと出会ったことで、彼の中で、武力ではなく対話の力を信じる思いが強くなりました。(本誌326号【私が銃を捨てた理由(わけ)】参照)

世界最大の軍事力を持つアメリカが何年駐留し戦闘しても、どれだけの人が犠牲になっても、アフガニスタンに平和は訪れなかった。むしろ治安は悪化している。武力で制しようとする戦争は、さらなる憎しみとテロリストを生み出しているのではないか。そう考えたサビルラは、個人で平和教育に乗り出しました。

子どもを武器から遠ざけるため、「おもちゃの銃(危険なものもある)



平和や争いに関する学び合いを村の中で実施すると、実にたくさんの若者の熱心な参加が見られた

に「NO! キャンペーン」を実施したり、自宅に人を集め家庭内や友人間の喧嘩などを解決した経験を発表するスピーチ大会を行った。まず、自分の一番身近な家族・友人らに向けて個人的に働きかけたのです。

人々の思いと実践

—ピース・アクション始動—

サビルラが始めたこの平和教育を進展させ、JVCは17年から「ピース・アクション」を進めています。「ピース・ブックレット」(注2)の作成を一緒に、若者や女性がそれぞれ集まって平和や争いに関する経験や考えを発表し聴き合う場作りを行いました。

「平和について語る場に、一体どれだけの人が関心を示すだろうか」との日本側担当者の心配を他所に、蓋を開けてみると多くの若者が積極的に参加し、熱心に思いを語ってくれました。平和というテーマに並々ならぬ関心があるにもかかわらず、そういうことを語り合う場合は、JVC以外ではあまりないそうです。若者は戦闘員としてリクルートさ



JVC現地スタッフのサビルラの発案で始まったピース・アクションで使われている「教科書」。非暴力の地域社会への指針が描かれている

れ、直接的犠牲者になりやすい存在です。自爆攻撃犯の多くは10代とのデータもあります。実際、参加した若者の多くが、戦闘に行った兄弟や近しい友人を失ったという辛い経験を持っていました。

あるとき、嬉しい報告が届きました。ある村で「商店でのおもちの銃や麻薬の販売禁止」という新たな取り決めがなされ、そのことを村人が「JVCのピース・アクションで学んで実践したんだ」と他の村の人びとに誇らしく伝えてくれたのです。人びとが自らを「ピース・アンバサダー」(平和の大使)と意識し、平和の取り組みを周りに伝えていく。これがまさに私たちが目指していたことでした。

平和の抵抗を続ける人々を忘れない

遺憾なことに、この活動が開始した17年からもアフガニスタン全体で治安悪化に歯止めはかからず、現地職員の家族も街で発生した自爆攻撃に巻き込まれて死傷しました。

しかしピース・アクションは、JVCが活動するナンガルハル県内の6つの郡からワークショップに参加するなど、より多くの人びとが参加してきています。今年に入ってから、国内でもひととき戦闘が激しく治安の悪さで知られていた、ナンガ



客人を手厚くおもてなしするのはアフガニスタンの文化だ。訪れる先では丁寧に迎えられ、必ず、熱いお茶を出してくれた。訪問者が女性であれば、家の奥で家族の女性たちと会うこともできる

◎注2…英名タイトルは「Road to Peaceful Life」。家庭や地域での争いごとの解決、暴力からの子どもの保護、親も子どもも男性も、各自が平和実現のために果たすべき役割などを身近な事例で紹介する。イスラムの教えにも則り、コーランの引用など人びとの慣習に沿うように作成された。

ルハル県のある村から「ぜひ、自分たちの村にも来てほしい」との要請を受け、JVCの現地スタッフ、そして、これまでJVCと協働してきた地域の村人の訪問が叶い、住民間の交流を行うことができました。

この数ヶ月で一定の治安改善が見られたとはいえ、周りからその地域に行くことを止められた人もいたそうです。その交流では、「武装勢力を呼び込まない安定した村づくりをするためのノウハウを他の地域からもぜひ学びたい」といった思いが語られました。

報道関係者や援助関係者が赴くことが難しくなったアフガニスタンの情報は日本では非常に限られています。私たちは、日々そこで活動する仲間と毎日のように連絡を取り、メディアの報道とは違う視点から、現場の声を聴き、そこに生きる人びとと交流を重ねています。

「紛争」、「テロ」、「暴力」などの言葉に埋もれてしまいそうなアフガニスタンで、まさに今、命を懸けて平和のために人びとが動いているという事実をしっかりと発信し、「ピー

ス・アンバサダー」が増えていくよう、思いと取り組みをつなぐ役割を果たしていきたいと考えています。

(2) 識字教育

識字教育への期待 村人との対話

アフガニスタンでは、長い紛争や女子教育が禁止されていたタリバン政権時代(1996~2001)を



2016年12月、これまでJVCが運営していた診療所を現地団体に移管する時期、日本側の担当者、小野山(写真左)と加藤もアフガニスタンに出張し、村人と話し合った。右の写真の手前が現地で教育担当のアジマール

識字アクション概要

●上位目標

非識字人口が多いナンガルハル県クズ・クナール郡で、男女の区別なく読み・書き・簡単な計算を学ぶ機会を拡充する。教育という権利の実現と同時に地域全体ならびに将来世代にも教育の重要性が伝わる。

●対象

非識字の15歳以上の男女約300人

●教室の時間と期間

1日2時間、週6日、9ヵ月間(=432時間)

※農繁期や酷暑の時期には時間帯など調整。

●教材

日本政府の財政支援のもと、UNESCOとアフガニスタン教育省識字局が共同で作成したテキストを使用する。

●内容

事業地での多言語パシトゥ語の読み・書きと算数を学び、アフガニスタンの基準で公立小学校3年生に相当するレベルを目指す。

●特徴

識字教室運営では、教室の場所、教師、生徒の選定や調整などを村人にも担ってもらい協力体制を築く。非識字は日常生活に不便・困難を生じさせるため、単に文字を覚えるだけでなく、日常生活の中で識字能力を活用し、覚えたことを忘れぬよう、使い続けられることを目指す。例えば、保健に関する情報、家計簿、招待状、回覧版、ポスター、看板など、教材以外の文書を提供、携帯電話の使用や服のサイズを測るなどの練習、料理レシピ作りなども検討。また、これまでJVCが実施してきた地域保健と平和構築活動にもつなげていく。

経て、成人識字率は約3~4割(女性は2割以下)と世界で最も低い国の一つです。とくに農村部では、施設や教員の不足、女子教育への制限、治安悪化などにより、教育環境はより厳しい状況です。

学齢期に教育を受けられないことの影響は一時的な権利の侵害にとどまらず、生涯にわたって雇用やその他の社会参加の幅が大きく狭められてしまうことも意味しています。

JVCアフガニスタン事業は、前述のピース・アクションと合わせ教育支援を継続しています。これまでは教員研修や健康教育などを公立の

学校で行ってきましたが、18年度からは、新たに「識字アクション」と称し、制度上、公立学校に復学できない15歳以上を対象としたノンフォーマルな識字教室を開催しています。(概要は左表)

アフガニスタンは行政も識字教育に取り組んでいますが、国家予算の多くを軍事費・治安維持に充てざるを得ない状況の中、最も基礎的なインフラ整備も圧倒的に不足し、教育含め各分野で多くを国際援助に頼っています。JVCは、活動地域でこれまで公的診療所の運営と地域保健の分野で協力してきましたが、これ



特に女性の場合、(遠くの学校ではなく)自分の村の中で学ぶのであれば安心、という家庭も多い。識字教室は先生の自宅の一室を借りて行っている

らを現地団体に移管した際(本誌325号「特集」アフガニスタン医療事業の終了)、現地スタッフや村人との話し合いの中で、今後取り組むべき課題として非識字の克服が挙げられたことから、識字プロジェクトを形成してきました。

JVC 識字アクションの特徴

JVCがサポートする識字教室には大きく三つの特徴があります。

一つは、学習者が自分の村で、同じ村出身の同性の先生から学べることに。特に女性が親族以外の男性に会うことや、遠くの村に一人で出かける

ことができない習慣がある地域では、この点の考慮がまず必要でした。

タリバン政権の01年

崩壊以来、女子教育回復への努力が続けられ、この地域でも今、数少ないですが高校を卒業した女性がいま。識字教室開始にあ

たり、筆記試験や面談などの選考を受けた彼女たちが研修を受けて識字教室の先生となり、同じ村の女性たちに教えています。男性教室では男性の先生が教えています。

もう一つの特徴は、学ぶ内容です。基本的な構成は教育省識字局のプログラムに沿うものですが、JVCは、これまでの村の人たちの自主的な取り組みがさらに根付いていくよう、これまで培ってきた地域保健のトピックや教材を使用したり、現在進行中の「ピース・アクション」の要素を取り入れたり、学ぶ内容に少しアレンジを加えています。

さらに、識字アクションは文字の読み書きを学ぶだけではありません。事前調査では、教育をあまり重



大人になって初めて文字を覚える経験をする女性。まずは自分の名前や家族の名前を書くことから練習する

要視していない親が、学齢期の子どもを学校に行かせないケースも多いことがわかりました。そのため、地域全体で教育への意識を高め、より多くの子どもが学校に通い、継続できる環境を作っていくよう、ドロップアウト(中退)予防のための啓発キャンペーンも実施しています。これには識字教室の参加者や先生たちの協力を得ており、今まさに学んでいる本人たちの参加のおかげで、文字や計算を学ぶことの喜びやメリットを、他の村人にも説得力をもって伝えることができます。

未来に向けて

18年度は、治安回復の兆しがなかなか感じられず、また武装勢力による教育機関への攻撃が続く中で、私たちには大いなるチャレンジの一年でした。

年度初めから、行政手続き、適切な教室の確保、先生の選考や研修：など初めてづくしの苦労が続き、7月に現地スタッフから届いた「今日が記念すべき識字教室の第一日目

す！」との開始報告と、色とりどりの衣装に包まれた女性たちが所狭しと集う教室の写真を見たときの感動は、今でも忘れられません。

学習者の一人、シヨービナさん(女性・25歳)は、生後3カ月の赤ちゃんの時、内戦中だったアフガニスタンから隣国パキスタンに逃れました。だが、難民生活中に病を患い脚が日に日に細っていく、歩くこともままならなくなり、アフガニスタンに戻ったときに手術を受けましたが治ることはなく、今は杖を使っています。その彼女が、熱い思いで伝えてくれたことがあります。

「この識字教室を修了することができたから、この脚ではどこにも行けないから、今度は自分がこの村の識字教室の先生になりたい」

シヨービナさんが将来、今度は先生として参加してくれたら。そこで学ぶ生徒が、また新たな選択肢を持つことができたら。そんな想像を膨らませながら、教育は未来への投資であり、決して途切れてはならないプロセスであると、改めて実感を強めています。

読者のみなさんからの質問募集中!! 会員担当: 横山までお寄せください。



パレスチナボランティアチームで刺繍製品の商品開発のアイデアを出し合っている場面

Q JVCってボランティアがどのくらいいるの?

A 昼間に事務所に来てくれているボランティアさんの時間を合算すると、フルタイム職員1名に匹敵。他にもイベントや資金集めをしたり、現地の活動の核をボランティアさんが担っている事業も。

『誰かの支えになりたい』という思いで日々関わってくれています。

日本のみならず、世界中でたくさんのボランティアさんたちに支えられているJVCの活動。秋葉原にある東京事務所には、毎日のようにボランティアの方々がいっぱいいます。今回は皆さんを「昼ボランティア」、「国別・分野別ボランティアチーム」、そして「現地でのボランティア」に分けて見てみましょう。

■ 昼ボランティア

例えば2017年度は、57人の昼ボランティアさんたちが合計1,892時間も作業してくださいました(2018年度は集計中)。これはなんと、フルタイム職員1人分の年間作業時間に匹敵。事務所以外でもイベントのお手伝い、デザインやイラストのご提供、コンサートでのボランティアなど、記録が取れなかった方や作業もあることを考えると、JVCには常時2~3人のボランティアさんがいる計算になるのではないかと思います。「散歩の途中で」と言いながらフラリと来所される方、事業の勉強をしてイベントまで主催される方、「匠」とも呼ばれるベテランさんもうらっしゃり、発送作業の前には作業机の前に人がギュッと集まります。

■ 国別・分野別ボランティアチーム

JVCには国別・分野別ボランティア・チームの活動もあります。一番若いチームは、2016年4月に発足した英語ボランティア・チーム。JVCの英語ウェブサイトの更新が滞っていたのを見かねたメンバーが自主的に立ち上げ、今ではウェブサイトのみならず動画や年報、チラシまで英語を翻訳してくださる心強いチームです。

国別チームは、アフガニスタン、アフリカ、ラオス、パレスチナ、タイ、カンボジア、イラク、コリア、そして会計ボラチームが日替わりで夜に活動中。事業を資金面で支えるための書き損じはがき整理や石鹸づくり、勉強会の開催、ときには映画上映会まで、様々な活動を実施しています。

■ 現地でのボランティア

また、各事業地の現場でも、自発的に動くたくさんの方々によってJVCの活動は大きく支えられています。例えば南アフリカでは、人々が集まる施設(ドロップ・イン・センター)のケア・ボランティアさんたちが青少年たちを支えています。栄養のある食事を摂るための家庭菜園づくり指導やHIV感染予防活動など、若者一人一人のケアを彼らボランティアが行っています。

パレスチナ・ガザで子どもたちの健全な発達・成長を支えているのは、地域から集まった40人の女性ボランティアさん。保健師たちによる専門トレーニングを受けて子どもの栄養・発達アドバイザーへと育った彼女たちが、今日も地元の子どもに検診を行い、家族の相談に乗っています。スタッフが活動について聞くと、彼女たちは口々に「地域で頼られる存在になれて嬉しい」と語ってくれました。「『誰かの支えになりたい』という願いは、日本でも海外でも同じなのだ」とこちらも嬉しくなるコメントです。

いかがですか? ボランティアが集うJVCの輪に、ぜひお気軽にご参加ください!

(広報/FRグループマネージャー 並木 麻衣)



東京公演の打ち上げで、JVCコンサートの創設者アイネス・パスカビル(右)と連れ合いのデイビッド氏が祝杯をあげた



東京のコンサート会場のロビーでは、これまでのコンサートのチラシとプログラムがに展示された



最後の東京公演では、ホール一杯の観客が来場した

席のところ、予備椅子対応)を記録しました。

前年は当日券も合わせ1500枚だったことから、いかに18年がすごかったかわかります。大阪、東京ともにほぼ完売の状況で当日を迎えることができました。フィナーレ効果は、ホールの値上げ見送り、企業数社の寄付増額、東京での指揮者とソリスト2名への宿泊無償提供来場者への福引抽選の新規賞品提供にもつながりました。企業協賛の総額は増えませんでした。新規のつながりや、支援の復活など嬉しい結果となりました。18年度収益は約580万円(19年3月現在。前年比345万円増)の見込みです。

音楽は国際貢献への強力なツール

ヨス氏が、東京公演後のインタビューでこうおっしゃっていました。

「長く続いたJVCコンサートが最後を迎える。皆がそれを意識したの特別な雰囲気がありました。音楽をJVCのような素晴らしい取り組みとつなぐ機会はめったにありません。たいいてい音楽は音楽だけですから、これも特別なことです。(音楽は)とても強力なツールです。音楽を通して皆が一緒に何かをなすということは、政治や社会の面でも世界にもっとあってほしい。(JVCコンサートは)そんな素晴らしいシンボルと言えます」

ヨス氏はコンサートの意義を評価し参加しましたが、創設者パスカビルはここにこだわっていました。彼女は出演者への

出演依頼時に「あなたのTalent(才能)とTime(時間)をDonate(寄付)してください」と言っていました。

こちらが提示したギャラ以上の金額交渉には応じず「コンサートの趣旨を理解してくれる人に来てほしい」と思いを伝え続けました。ありがたくも、この思いを受け止めてくれた音楽家の皆さんが世界中から参加してくれました。

新たな組織も始動！

3月2日、東京公演当日の動画をJVC合唱団員と見る鑑賞会を開催しました。60数名の団員と、コンサート創設に一役かったJVC初代事務局の長星野昌子も同席し、当日の演奏に聴き入りました。

合唱団員も「素晴らしい。感動した!」思わずお客さんの気分で拍手しちゃった「ソリストの声、演奏全体が素晴らしい。当日ステージでは聴けない演奏でした」とおっしゃっていました。全編鑑賞会もぜひ企画したいところです。

特筆すべきは、東京でこの4日後、JVC合唱団の有志約10人が「音楽で国際協力」のスピリットをつなげたい!との思いから立ち上げた新合唱団「メサイアフェスティバルクワイア」が始動したことです。現在既に、約50〜60人のメンバーが練習に参加しています。

大阪の合唱団コードリベット・コールも「JVCさんどうつながるかを考えます」と今後の活動を模索しているところです。

JVCとしても、支援企業との関係が途切れないよう、たとえば「支援してください」の思いをインタビューさせてください」と要請するなどの提案をしています。

最後に、これまでJVC国際協力コンサートに関わってくださった皆さまに心より感謝申し上げます。創設者アイネス・パスカビルさん、歴代JVCコンサート実行委員会のメンバー、最終年も活動してくださいました梅田満枝さん、鎌田早苗さん、五味澄子さん、田中菊子さん、中山康子さん、和田めぐみさん、嶋紀昂さん、本当にありがとうございました。



小雪が舞うなか、約70名の参加者が集まったギャラリートークでは、平壤の交流に参加した学生たちが、交流で感じたことや迷いを率直に話した

[報告] 第18回南北 코리아 と日本のともだち展報告 ■■■■■

「子どもの絵」を媒介に 平和な東アジアを築くのは 「大人の仕事」

2月開催の朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）や日本など東アジアの子どもの絵画展は好評のうちに閉幕。同じ会場で、昨年8月に平壤での日朝大学生交流に参加した日本人大学生の報告も行われた。「北朝鮮に利用されている」との批判に葛藤したからこそ学生たちは「再訪したい」との意欲を見せる。若い世代同士の交流に東アジアの平和実現の鍵はある。



JVC 코리아 事業担当
宮西 有紀

いった「北朝鮮脅威論」が止む気配がありません。

「どんな時も続けてきた 「絵画交流」

今年も2月に第2回米朝首脳会談がベトナムで開催され、再び朝鮮半島に注目が集まるなか、2月8日から10日までの3日間、『第18回南北 코리아 と日本のともだち展』（以下、ともだち展。主催、同実行委員会）が東京・秋葉原で開催されました。

『ともだち展』とは、大韓民国（以下、韓国）、北朝鮮、中華人民共和国（以下、中国）、そして日本と在日コリアンの子どもたちの絵をひとつの会場に展示する絵画展で、その目的は、国交がなく、今も戦争状態にあるこの東アジアで、絵をとってお互いを紹介しあい、相手を知ることから平和づくりを始めようとすることです。

01年に開始し、北朝鮮による核実験やミサイル発射実験などで日朝関係が厳しいときでも、毎年各地を訪問し、絵画交流を実施してきました。今年も「わたしのまち あなたの

国は危機を煽るけど

2018年、朝鮮半島をめぐる情勢は大きく変化しました。

平昌冬季オリンピックからの融和ムードを受けて、4月・5月・9月に3度の南北首脳会談が行なわれ、また、6月には史上初の米朝首脳会

談がシンガポールで開催、日本国内でも大きな関心を集めました。

一方、南北首脳会談や米朝首脳会談においては、南北融和と米朝の歩み寄りが見えつつありますが、日本国内では、17年の米朝関係悪化やアラートのコマースや避難訓練などからの「北朝鮮が攻めてくる、日本も武装したほうがいいぞ」と



プロジェクトが携わる各地から名所の絵が集まり、会場の壁一面にソウル、平壤、延吉の町がひとつの地図として再現された

まち」のテーマで、各地から集まった個人作品のなから約150点が会場を飾りました。また、平壤、延吉（中国吉林省延辺朝鮮族自治州）、ソウルを訪問した際に実施した、「ともだちに紹介したい自分の町の名所」を描くというワークショップで子どもたちが描いた絵は、ひとつひとつが会場で再構成され、壁面いっぱいになり、ソウル、延吉の町が再現、共同制作「わたしのまちにおいてよ」としてひとつの大きな地図をつくりあげました。

反対の壁面には各地のワークショップの様子が映した映像が流れ、来場者はあらためてそれぞれの町の名所を確認したり、はたまた個人作品に添えられたメッセージを読んだり、じっくりと時間をかけて展示を見ていたことが印象的でした。

葛藤はあっても北朝鮮に再訪する

一方、市民組織「KOREAごどもキャンペン」は、平壤で日本語を学ぶ北朝鮮の学生と日本の学生が交流を行う「日朝大学生交流」を12年から行なっています。17年は情勢の悪化で学生の交流が中断しましたが、18年8月は平壤で2年ぶりに交流が行われました。

『ともだち展』での9日の同時開催イベントでは、中央大学教授の目加田説子さんを聞き手に、その交流に参加した6人の大学生が報告を行うギャラリートーク「大学生がひらく東アジアの未来」を開催しました。

およそ70名の聴衆を前に、学生たちは、まず最初にそれぞれの訪朝のきっかけや交流で感じたことを話し、「（平壤の）学生も自分たちと同じ生活をしている。自分が持つ偏見に気づいた」と語る学生や、「バレンタインデーなどガールズトークは世界共通」と会場の笑いを誘った学生も。

そしてトークでは、交流を経たの

「帰国後の心のうち」についても率直に語られました。

そこで語られたのは「平壤の交流を日本国内で伝えることの難しさ」でした。交流のことを周囲の人間に話しても、「平壤しか見えていない」「見せられたもの、つくられたもの」「北朝鮮の」プロパガンダに使われているのでは」「などの反応を受け、「あの一週間は何だったのか」「何が真実なのか」と学生たちは帰国後に葛藤していました。

なかには、訪朝経験を友人に話すのもためらう学生もいました。しかし、帰国後のプログラムを通して、在日コリアンや朝鮮学校の高校無償化問題などにも関心が広がったことを話すと、会場内の在日コリアンの方々からエールをもらう場面もありました。

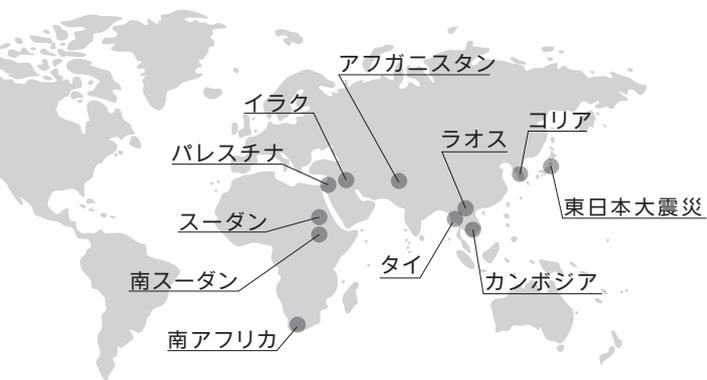
最後に、「また朝鮮に行きたいか」との質問に対し、学生たちは「もっと学んでからもう一度行きたい」と口を揃えていました。目加田さんの「この活動をこれからも発展させてほしい」という言葉と、成長する学生を前に、このプログラムを行う責

任をあらためて感じました。

「子どもの絵」を活かすのが「大人の仕事」

実は、今年の『ともだち展』では、9年ぶりに駐日韓国大使館韓国文化院の後援をいただくことができ、それが功を奏したのか、微用工問題などで日韓関係が厳しい時期でも、複数の韓国メディアの取材を受けました。『ともだち展』来場者の声にも「ぜひ未永く続けてください。日本だけでなく世界に紹介してください」とあるとおり、韓国の人びとにも日本での交流活動を知ってもらえて、東アジアの平和が広がることを望むばかりです。

また、「大人も知らなかったことを知る機会となり、絵を楽しむこともできました」という感想に見られるように、「子どもの絵」を媒介として、子どもの将来のために平和な東アジアを築いていくのは「大人の仕事」です。私たちは本気で自分たちの住む東アジアの平和を目指していきます。



JVCは現在、11の国・地域で活動しています。

プロジェクト一覧

12月後半～3月前半

コリア

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』／
大学生平和交流プログラム

◎『南北コリアと日本のともだち展』(以下『ともだち展』): 南北朝鮮、中国、日本そして在日コリアンの子どもたちの絵画とメッセージで構成される『ともだち展』。12月21日～25日に埼玉県浦和市で「さいたま展」、2月8日～10日には東京都千代田区で「東京展」(本誌12ページ参照)、3月8～10日には大阪市天王寺区で「おおさか展」が開催された。東京展の会場では「わたしまち あなたのまち」をテーマに絵画150点と共同制作「わたしのまちにおいでよ」を展示し、約350

名が来場した。共同制作の作品をつくるワークショップでは、『ともだち展』卒業生や訪朝学生を含む学生ボランティアが活躍した。

◎大学生平和交流プログラム: 12月8日、一緒に訪朝したジャーナリストの堀潤さんを司会に迎え、日朝大学生交流の一般向け報告会を浅草で開催、約40名が来場した。また、1月27日に第5回勉強会としてワークショップ「この一年をふりかえる」を実施、学生たちがこの一年のプログラムをふりか



聖公会大学日本学科の学生たちと日本の学生たち。交流は良い刺激となったようだ

えり、どんなことを感じたか、気づいたか、お互いの経験を話し合った。3月15日～20日には、韓国研修トライアルとして訪朝学生のうち2名と事務局2名が訪韓、韓国の大学生・大学院生との交流や、韓国のベトナム参戦を問い直す市民団体との対話などを行った。

(宮西)

調査研究

外務省・JICAとの
政策協議／各種提言



2月18日の政策協議には、国会議員や100名を越える市民も参加した

◎モザンビーク／プロサバンナ事業関連: モザンビーク・ナカラ回廊地域における日本のODA事業・プロサバンナに対する活動として、2018年度第3回ODA政策協議会(2月25日)にて議題提案、渡辺が参加した。

また、昨年12月に国連総会で「小農および農村で働く人びとの権利宣言」が採択されたことを受けて、同年11月に開催した「モザンビーク・ブラジル・日本3カ国民衆会議」(本誌334号参照)に参加した日本の農民や研究者、消費者らとともに「国連小農宣言・家族農業10年連絡会」を立ち上げた。ここが主催となり、2月18日に今回の国連宣言の意義を共有するための一般公開の報告会(院内集会)と、外務省・農水省を交えた政策協議を開催した。今後も、日本国内の「食と農」に関する課題と海外の援助政策をつなげながら、より広い文脈で「食と農」について考えていくため場として、関わりを継続していく。

(渡辺)

南スーダン

国内避難民・
難民キャンプでの支援



南スーダン青空教室で学ぶ年少クラスの子どもたちとクラス担当のボランティア教員

2013年から続く内戦は、9月に敵対する大統領派と前副大統領派、その他多数の反政府勢力が再活性化和平合意に署名し戦闘行為は沈静化したが、各地の状況は不安定で、難民や避難民の故郷への帰還は進んでいない。

スーダン国境沿いのイーダ難民キャンプでは、合計21カ所の幼稚園が、難民自身のボランティアによる84名の教員によって運営され、約2,200人の児童が通っている。1月には教員に対して2日間の図画工作クラストレーニングが実施され、図画工作の基礎知識や地元の素材を使った粘土や絵画クラスの展開方法などを学んだ。2月の学校巡回では、教員による授業改善も見られたが、同時に黒板や椅子などの学校備品の不足や飲み水用タンクの不足により、子どもたちが学校で水を飲めないなどの問題点も明らかとなった。

商業地区で暮らし「ストリートチルドレン」と呼ばれる保護者不在の児童に対して小学校への復学支援を継続。2月に学用品が提供され、現在29名が学校に通学している。

(山本)

タイ

日・タイ経験交流



出荷のシステムを学ぶタイ参加者(小川町風の丘ファーム)

タイでの「生活協同組合・市民農園・自立した地域づくり」の実現を目指し、タイNGOスタッフ、若手農家等を参加者として3回(2016年～18年)、日本研修を行った。10月下旬～11月初旬に行った18年度の交流プログラムのまとめを行い、参加者からは、「(NGOも)生産者と消費者の間に入る役割として、生産者だけでなく、もっと消費者の意識に働きかけをしないといけないと感じた。自分が活動するタイの地域でどういった形態がふさわしいのか、試行錯誤を続けたい」といった声があがった。(2019年度はさらなる交流のインプットはせず、3年間の交流プログラムを通じて得た学びが今後タイにおいてどのように展開されるかを待つ期間として、タイ事業は休止となる予定)

(下田)

スーダン

紛争による被災民支援
(南コルドファン州)



修理された井戸で水を汲む女性たち。家庭用水のほか家畜の飲料としても使用されている

昨年末から経済危機や長期独裁政権に対する民衆の抗議運動がスーダン全土に広まっている。一方、1月にバシール大統領がJVCの活動地であるカドグリを訪問した際の演説で、反政府組織に対して無期限の「自主停戦」を発表するなど、情勢は安定しており避難民の帰還も報告されている。

◎出生登録支援：JVCによる啓発活動や家庭訪問を通じた自発的な登録の有無や、登録前後の変化についてモニタリングを行った。支援対象地区の出生登録の保有率は95%に達し、就学率は20%程度上昇して70%に改善した。

◎教育支援：過去に机・椅子を支援した学校12校を訪問し、使用状況のモニタリングを行った。破損している机が複数見られた学校では、教師・生徒に対して備品の正しい扱い方を周知した。

◎給水支援：帰還地域で井戸2基の修理を行った。そのうち1基は昨年新規に設置した井戸であったため、井戸管理委員会・住民に改めて正しいハンドポンプの使い方の研修を行った。その後のモニタリングでは一日に90世帯以上が利用しており、住民の安全な水のアクセスに寄与している。(山本)

アフガニスタン

平和活動／
識字教育
(ナンガルハル県)



描かれた絵にはハート、花木、鳥、家族、話し合う様子、ペン、銃にバツ印をつけたものなどが多かった

これまでピースアクション活動で実施してきたワークショップに参加した村人から、「さらに多くの人々に非暴力と武力ではない平和的な解決法を伝えたい」とJVCに相談があり、村の学校と協力して、平和の絵を描くイベントを行った。小学生から高校生までの生徒たちがそれぞれの考える「平和」を紙の上に表現し、そこに込められた思いを発表しあった。

ナンガルハル県内にあり、国内でも特に政府と反政府勢力の戦闘が激しく、厳しい治安状況が続いていた地域との交流も深まり、複数の村からの代表者が会ってお互いの状況を話したり、武力に拠らない紛争解決の経験共有などを行うことができた。今後、これまでのJVCの活動地域以外でも、新たな市民による平和への動きが生まれ、ピースアクションが広がるように協力していく。

(加藤)

ラオス

農業・農村開発／
土地森林保全事業
(サワナケート県)



パンフレットを使って井戸の修理方法を村人に伝えるJVC山室(写真中央)

12月下旬、2018年度に建設を進めてきたピン郡農業普及センターの集会所が無事に竣工し、1月10日に活動村の代表者や関係行政機関を招いて落成式を開催した。また、タスクチームの一員として制作に協力してきた2019年版法律カレンダーの完成を受けて、1月下旬にはサワナケートで行政官を交えたカレンダー発表会議を行った。発表会議では中央省庁から講師を招き、自然資源の保全と法律遵守の重要性をテーマとした講演会をあわせて開催した。その後、2月から3月にかけて各活動村において、カレンダーを活用した法律研修を順次実施した。

基礎データ調査の結果と村人との協議を踏まえて策定した活動計画に基づいて、1月以降、キノコ栽培や家庭菜園の技術研修、深井戸、浅井戸の掘削および修理、小規模灌漑の候補地視察などを進めてきた。他方、自然資源管理の活動を担当する新規スタッフを採用し、コミュニティー林と魚保護地区の設置に向けて村人との話し合いを開始した。現在は、GPSによる村境の実測や、指標生物となる魚種の聞き取り調査を鋭意進めている

(岩田)

パレスチナ

若者のレジリエンス
向上事業／
栄養失調予防事業



ガザ中部、訪問した家で子どもの身長を測るボランティアのアマールさん。発達・発育検査はほぼ一人で行える

◎若者のレジリエンス・地域保健の向上事業（東エルサレム）：前期末試験と冬季休暇が明け、2学期が始まった。各校の学校保健委員会（SHC）が自主活動を再開、下級生へのトレーニング等を実施している。SHCが1学期に行った、住民と協働で地域の公衆衛生問題を解決する小規模イニシアティブについて、各校の経験を共有し活動を広く周知するための表彰式を準備中。

◎栄養失調予防事業（ガザ）：中部4地域にて家庭訪問による子どもの栄養・発達・発育状況の健診と、栄養バランスを考慮した衛生的な食事の調理法に関する講習を継続中。講習では「自分の子どもの健診もしてほしい」と要望が出るなど、活動周知の場にもなっている。40名のボランティア女性たちは能力・達成度に見合った指導を受け、地域の保健相談員として意欲的に活動に取り組んでいる。

◎現地代表の山村が内閣府国際交流事業「世界青年の船」にファシリテーターとして参加。11か国約240名の青年に対し、難民・紛争をテーマとしたコースを受け持ち、パレスチナ問題の解説やワークショップも実施した。（山村）

カンボジア

農村における生業
改善支援／環境教育／試験農場



TRCの書籍が、カンボジアの未来を担う若い世代に活用されることを願って（2019年2月27日王立農業大学にて撮影）

事業地・コンポンクダイでは、今年度中に予定しているため池掘削に向けての会議を、住民、村長、コミュニティーとともに12月末に実施した。候補地の絞り込みを行い、今後は利用者のルール策定などを経て、乾季のうちに掘削を行う予定。また、野菜を外に販売したいという希望のある事業地の農家とともに、車で1時間程の繁華街・シェムリアップ市内のスーパーやレストラン、それらと取引のある近隣の農家グループを訪問し、経験交流を行った。既に4月にオープンするレストランから、野菜の取引希望をもらっているため、まずは試験農場での栽培を開始し、出荷までのトライアルを行っている。トライアルの中で困難な点などをまとめ、販売を希望する農家に展開可能かどうかを検討していく。生活状況調査は対象6村のうち、2村での聞き取りを終えた。

プノンペン事務所では資料・情報センター（TRC）の移管を終え、全書籍を王立農業大学の図書館に移管した。2月末に移管記念式典を開催し、スタッフのほか、元司書のエンと、東京から代表の今井が参加した。

（大村）

南相馬

南相馬事業を終了

南相馬事業は、2018年度を中期方針の再延長フェーズと位置付け、原発事故からの避難者が暮らす北原復興公営団地での自治会結成サポート、並びに、事業終了後のJVCと福島の間取り方の検討という二つの課題に取り組んできた。自治会結成については年度途中で実現困難であると判断し、以降は住民が主体的に運営するサロン活動のサポートのみを実施した。JVCと福島の関わり方については、福島の問題を考えていくきっかけ作りとして、スタッフが福島を訪問する際の団体としての仕組みを作ることが決定した。これらの課題について一定の結論に至ったことから、2018年度をもって南相馬事業を終了する。これまで多くのご支援を頂き、感謝の念に堪えない。（横山）

イラク

日本国内でイベントを開催

担当のガムラが、東京近郊の中学校や高校、大学等でイラク／シリアや国際協力に関して講演し、また自治体国際化協会主催の外国人と日本人による意見交換イベントにも参加した。

2月9日にイラクボランティアチーム主催で、デーツ（なつめやし）を使ったイラクのお菓子を手作りするバレンタインイベントを実施した。お菓子作りのあと、イラクからの女子留学生2人がイラクのバレンタインについて話してくれた。大人8人とお子さん3人に参加いただいた。参加者の方々から「イラクの日常を体験できる企画で、よかった。これからもこのようなイベントを開いてほしい」との声をいただいた。

（ガムラ）

南アフリカ

新事業に向けての調査

2018年度は調査・情報収集を実施、新しい現地パートナー2団体（親のいない子ども等が通う子どもケアセンター）と協働することに合意、これまで、ともに活動を計画・実施するための土台づくりを行ってきた。これを受けて、12月には、JVCとの協働事業で行う活動のイメージをもつために、新パートナー団体と2017年度までのパートナー団体との間で経験交流を行った。これに基づき、1月から3月前半に、今後約3年の具体的な活動の内容、実施スケジュール、モニタリングの方法などをともに検討、合意した。季節と成果が見えやすいという理由から家庭菜園研修から開始することで合意、研修開始前の状況の確認と記録を開始した。（渡辺）



子どもたちの未来に
笑顔を贈ることができます。

お香典寄付をくださったT様からのお言葉(2017年)
故人と関わりが深かったJVCで役に立て
て頂けるのは、とても嬉しいことですし、
私のなかでもよかったなという思いをもつ
ことができました。

JVCは「認定NPO法人」であるため、ご寄付いた
だいた財産部分には相続税が課税されません。
またご希望に応じてパネルや教材への印刷によりお
名前を形に残すことも可能です。



遺産寄付・相続寄付のお問い合わせ

特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター
広報/ファンドレイジンググループマネージャー 並木

メール namiki@ngo-jvc.net

TEL 03-3834-2388

FAX 03-3835-0519

〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4

クリエイティブOne秋葉原ビル6F

「人を大切にする社会を、次世代に残していきたい」
「争いも貧困もない社会への願いを未来に託したい」
そんな思いから、ご自身、またはご家族の遺産やお香典を
ご寄付としてJVCに託す「遺産・相続寄付」の
お申し込みをくださる方が増えています。
ご寄付を通じて、世界の人々の暮らしと未来を明るくしませんか。

遺産寄付・相続寄付のご案内
遺贈寄付で
あなたのご意志が
未来に続く



JVC ALL STAFF

世界中で活動しているJVCの全スタッフからのメッセージ

去年一番の思い出を教えてください。

東京事務所



前列左から:伊藤、加藤、今井、長谷部、稲見、菊地
後列左から:細野、宮西、(今中,)並木、横山、渡辺直、仁茂田、ガムラ、中原、小林、木村

別枠上から:清水、中野、渡辺真

今井 高樹(代表理事)

夏休みを取って久々に旅行。でも行き先は…またアフリカでした。

清水 俊弘(副代表/非常勤)

うちの畑のカボチャを食べたおばあさんに“80年生きてて一番美味しい”と言われたこと。

長谷部 貴俊(事務局長)

前職のNGOで一緒にいた伊藤解子さん、鎌倉幸子さんがJVCにも関わってくれたこと。

細野 純也(事務局次長)

長年クリアできなかったIT系の資格試験に合格。変化に対応しつつ次のレベルへ。

木村 茂(ラオス事業担当)

3年ぶりに北タイの友人たちを訪れ、旧交を温めることができたこと。

渡辺 直子(地域開発グループマネージャー/南アフリカ事業担当)

同い年の親友があげた結婚式。約10年ぶりに参加した結婚式はやっぱり感動して泣けた。

加藤 真希(アフガニスタン事業担当)

和歌山に里帰りしたときに、家族と一緒にワラビを採りに山を散歩したこと。

渡辺 真帆(パレスチナ事業担当)

渋谷の路上で誕生日パーティーをしたこと。街角でいろんな人とおしゃべりできます。

小林 麗子(スーダン事業担当)

出張先で息子(6歳)がいるいろんな人に優しくしてもらったこと。

ガムラ・リファイ(イラク事業担当)

妹の結婚式があって、弟が初めて仕事を見つけて、難民の弟妹の生活が整ってきたこと。

中野 恵美(イラク事業補佐/非常勤)

6年間務めた小学校のPTA本部役員(うち3年間は副会長)をめでたく退任。

宮西 有紀(コリア事業担当)

初めての広島・花巻・延吉・ソウル。全部出張、ソウルの観光時間は3時間(笑)。

菊地 真歩

(KOREA)子どもキャンペーン事務局)大好きなミュージカル2作品が同時期に再演!年間観劇回数が過去最高記録でした。

並木 麻衣(広報/ファンドレイジンググループマネージャー)

双子乳児の子育てに追われ、記憶がほとんどありません…。子どもが健康で何よりです。

横山 和夫(会員・支援者担当)

4月から南相馬に長期出張。夏に安達太良山に登り、「ほんとの空」を体感しました。

仁茂田 芳枝(広報担当)

ひとつの出来事というより、友人や家族みな健康でたくさん楽しいときを過ごせたこと。

伊藤 圭(収益事業担当)

10万円位のテントをセールで6万円で買ったこと。今年もキャンプに行くぞー!

中原 和江(経理担当)

旅での失くした物を、全国の遺失物検索や電話を駆使して執念で探し出したこと。

稲見 由美子(経理担当/労務担当)

三男が卒業式で「〇〇高校を誇りに思います」と一礼。拍手が鳴り止まず、思わず涙が…。

南スーダン事務所



イサム

イサム・アンドー(現地調整員)

妹が大学を卒業することとなり、サウジアラビアでの仕事も見つけられたこと。

エルサレム事務所



左:山村、右:大澤

山村 順子(現地代表)

夏にスウェーデンの森で、現地の人と「サウナ⇄冷たい湖へダイブ」を繰り返したこと。

大澤 みずほ(現地駐在員)

友達と沖釣りをして、船に酔いに酔いながらめっちゃくちゃたくさん魚を釣ったこと。

カンボジア事務所

ポー・コン (総務)
娘が高校に進学することが決まったこと
(補足:カンボジアの高校就学率は約20%)。

ミエン・ソマツチ
(フィールドスタッフ)
サポートを受けながら、初めて自分たちだけでワークショップの進行を担当したこと。

チャン・ポク (フィールドスタッフ)
家でコメがたくさん収穫できたこと。
ソマツチと、村でのワークショップを担当したこと。

チン・ブンヒエン
(フィールドスタッフ)
息子が結婚したこと。担当している試験農場で子牛が無事に生まれたこと。

パオ・リッツ
(ドライバー/フィールド補佐)
勤続25年。日本出張で人生初の海外へ。日本の戦後復興の凄さを直に学ぶことができた。

パート・ピー
(プロジェクトマネージャー)
(海外留学中のためコメントなし)

大村 真理子 (現地代表)
一時帰国中の家族や友人との時間。食べ物のおいしさ。リッツを日本に招聘できたこと。



左からパオ・リッツ、ポー・コン、チン・ブンヒエン、チャン・ポク、大村、ミエン・ソマツチ

ラオス事務所



岩田 健一郎 (現地代表)
ラオスの心優しい人々と、美しい自然に出会えたこと。

山室 良平 (現地駐在員)
活動地の村人と雑談したこと。

フンパン・センチャントン
(プロジェクトコーディネーター)
困難を乗り越えた末にプロジェクトのMoUが通ったこと、娘の結婚式を行ったこと。

ホンパソン・タンマウォン
(運転手)
JVCのスタッフが団結し助け合って、よい仕事を行ったこと。

オワンティン・テパウォン
(フィールドオフィサー)
娘とともにいて世話をしたこと、初めての活動を担当して学べたこと。

スィーサワン・インタコン
(フィールドオフィサー)
ケガをした妻が退院して、健康を祈願する儀式であるパーシーをしたこと。

ソムソン・ドッサニー
(フィールドオフィサー)
北タイに行く機会があり、北タイの人々の自然資源管理を学べたこと。

3列目左から:山室、岩田、ホンパソン、スィーサワン

2列目左から:フンパン、ソムソン、スクサワット、ベン

1列目左から:オワンティン、スィーウォン、ピンマソン

スィーウォン・サイヤペット
(庶務)
ルアンパバンでの研修に参加し、ケーススタディを学び、樹種保全の菜園を見たこと。

スクサワット・スィークンム
アン(フィールドオフィサー)
カンボジアの森が多くて自然豊かな地域へ研修に行き、多くの知識を得たこと。

ピンマソン・サイシヘン
(会計)
スタディツアーで北タイに行き、北タイの人々の成功と闘い、思いやりを見たこと。

ベン(フィールドオフィサー)
入職後の最初の挨拶でスタッフと話して、歓迎されてJVCの一員になった気がしたこと。

南アフリカ事務所



左から:フィリップ、ドゥドゥジレ、モーゼス

ドゥドゥジレ・ンガビンデ
(プロジェクトコーディネーター)
2017年度に参加したアジア学院の研修で出会った日本の友人の結婚式に参加したこと。

モーゼス・シャバニ (経理担当)
妻のために婚費(※)を納め終えたこと。そして、現在建築中の家の資材が全て揃ったこと。
※アフリカにおける婚費:日本の結納金のようなもの。これが納められて初めて夫婦として認められる。

フィリップ・マルレケ
(プロジェクトフィールドアシスタント)
2017年度までのパートナーの子どもケアセンターが、自分たちで活動資金を得られたこと。

スーダン事務所 (ハルツーム・カドグリ)



ハルツーム事務所左から:山本、モナ

モナ・ハツサン (現地代表代行)
大学時代の友人と23年ぶりの同窓会。海外で働いている人も多く久しぶりの再会に歓喜した。

山本 恭之 (現地駐在員)
フィリピンで出会った日本人医師にスーダンで再会! 相変わらずザンディで素敵だった。



カドグリ事務所後列左から:イスマイル、サラ、サイーダ、アフマド

今中 航 (現地駐在員)
JVC入職の為、エジプトを去る際、イエメンの友達と道端で抱擁し2人で大号泣。

イスマイル・ゴマ
(チームリーダー)
大学院の平和・開発学の第二セメスターに入ったこと。

サラ・モゴ (フィールドオフィサー)
親愛なる姉が結婚した!

サイーダ・アルファキ
(フィールドオフィサー)
新しい地域を訪れ、新しい人々と出会い、その出会いによって人生が変わった。

アフマド・アルハーディ
(フィールドオフィサー)
結婚した!

「本で寄付」プログラム
BOOK・OFF®

×
JVC
 Japan
 International
 Volunteer Center

読まなくなった本や、聴かなくなったCD、
 使わないDVD・ゲームはありませんか？
 箱や袋に詰めて送るだけで、ご家庭の不用品
 が寄付になり、アジア・アフリカ・中東の
 人々の支援に役立てられます。

簡単申込 | **送料無料**

ブックオフコーポレーション株式会社が買い取り、その代金の全額
 がJVCに寄付されます。さらに社会貢献活動の一環として、買取
 金額の10%が寄付に上乗せされます。ぜひご協力ください！

読まない本が！
寄付になる！

CD、DVD、ゲームも無料で集荷
 断捨離で国際協力



4 ご寄付として お振込み

ブックオフでの査定が完了
 した後、買取金額の全額が、
 日本国際ボランティアセン
 ターにご寄付として振り込
 まれます。

3 無料で集荷

ご指定いただいた集荷日・
 時間帯に、運送会社のドラ
 イバーが無料で集荷にうか
 がいます。
 ドライバーが、印字済みの専用集荷
 伝票を「箱数分」お持ちしますので、
 ご用意は不要です。

2 箱詰め

おひとり持ち上げられる程
 度の重さ・大きさまでで願
 いします。
 15kg以内(ひと箱あたり)を目安に
 して、箱詰めをお願いします。ご寄付
 いただけるのは「本・CD・DVD・ゲーム」
 となり、本なら30点以上、CD・DVD・
 ゲームなら5点以上よりお送りいた
 だけます。箱の数は最大19箱までです。

1 お申込み

「専用申込フォーム」から集荷
 のお申し込みを行ってくだ
 さい。「箱数」「集荷日」が同時
 に予約できます。
 「箱数」「集荷日」はお申し込み後の
 変更も可能です。前日までにブック
 オフオンライン・カスタマーセン
 ター(フリーダイヤル:0120-25-2902)ま
 でお問い合わせください。

専用申込フォーム

<https://www.ngo-jvc.net/jp/form/hondekifu.html>

上記URLか右のQRコードをご利用ください。



お問い合わせ先

買い取れる商品の種類などに関するお問い合わせ
 ブックオフオンライン・カスタマーセンター
 ☎ 0120-25-2902

「本で寄付」プログラムに関するお問い合わせ
 JVC東京事務所

TEL 03-3834-2388 E-MAIL info@ngo-jvc.net

よくある質問

どのような商品を送っていいのですか？

ご寄付いただけるのは「本・CD・DVD・ゲーム」となり、本なら30点
 以上、CD・DVD・ゲームなら5点以上よりお送りいただけます。本プ
 ログラムでは、商品の状態が良好なものを買取り対象としています。

買取基準の詳細は、ブックオフオンライン・カスタマーセンター(フリーダイヤル:
 0120-25-2902)にお問い合わせいただくか、ブックオフの買い取り基準一覧を
 お読みください。http://www.bookoff-online.jp/alliance/kaitori.html

「本で寄付」のために近くのブックオフ店舗に 持ちこむことは可能ですか？

申し訳ございませんが、ブックオフ店舗へのお持ち込みは対象外と
 なります。必ず、当団体の専用お申込みフォームからお申し込み
 いただくようお願いいたします。

イベントあらかると

1月～3月

イベント・ピックアップ!

1/25(金) 東京都新宿区

「旅×NGO×パレスチナ・イスラエル」

2018年度パレスチナ事業インターン 大川 梨恵

皆さんはどんなものを見たとき、知ったときに、その国へ旅行したくなりますか? 美味しい食べもの? 綺麗な景色? 世界遺産や歴史的建造物? それとも、現地の人との温かい交流でしょうか。

実はパレスチナには、その全部があるのです。日本ではなんとなく「危ない」地域として思われがちですが、行ったら拍子抜けするくらい旅行しやすい場所です。そういった「パレスチナのリアル」を知ってもらうため、1月25日にパレスチナについてのトークイベントをソーシャルスタンドさんと共催で行いました。スピーカーは、2018年の初夏、パレスチナを旅行したソーシャルスタンドさんの近藤さん、JVCパレスチナ事業新担当の大澤さん、そして私たちパレスチナ事業インターンの女子大生2名の計4名です。

イベントでは、イスラエル/パレスチナ問題の解説から始まり、今のパレスチナの情勢、観光の見どころなどを伝えました。特に私が来場者の方に知ってほしかったのは「ポップなパレスチナ」。青い空に金が映える「岩のドーム」をはじめとして、赤や青のカラフルな色が特徴のヘブロン陶器、フルーツがふんだんに使われたアイスクリームとチョコレートがけ



「ポップなパレスチナ」を伝えるためにたくさんの写真をお見せしました。

のシェイクなど、たくさんのパレスチナの写真を見ていただきました。

また、インターンの相方である勅使河原は、パレスチナからは切っても切り離せない「イスラエルの占領の影」について話しました。「この土地はアラブ人に盗まれた」と大きくヘブライ語で書いてある看板や、占領に反対するイスラエル人が行う「イスラエル占領ツアー」など、行ってみなければ見ること/知ることが出来なかった景色を紹介しました。

イベントは盛況で、「実際滞在費にどのくらいかかるのか」「一週間で回りきれるか」など、具体的な旅の質問なども多く出ました。後日、「あのイベントに背中を押されて、航空券取りました!」という連絡がきた時には、「パレスチナの魅力を知ってもらえた!」と飛び上がるほど嬉しく感じました。

なんとなく関心があっても、時間や金銭的にもなかなか行きにくい場所、パレスチナ。でも、少しの勇気と行動力を起こしてみれば、案外簡単に行けてしまいます。

綺麗な景色も美味しい食べ物も暖かい現地の人もいて、とっても魅力的、でもそれだけでは終わらないパレスチナに、皆さんも旅行してみたいはかがですか。

その他の主なイベント

1/10(木)、1/17(木) JVC東京事務所
映画『ELEMENTAL』、『静寂を求めて』
上映会

1/12(土) 東京都千代田区【外部講演】
南スーダン和平合意と
今後の支援のあり方を考える

1/12(土)、1/26(土)、3/2(土) JVC東京事務所
ガザを学ぼう&
パレスチナ刺繍でストラップ作り

1/20(日) 神奈川県海老名市【外部講演】
第53回WE講座 南スーダン報告会
南スーダンの現状と私たちに何ができるのか

1/26(土) 東京都東村山市【外部講演】
ガチで平和を作るには?
～アフガニスタンの現状と市民による平和の取り組み～

2/2(土)～2/3(日) 大阪府大阪市【出展】
ワン・ワールド・フェスティバル

2/3(日) 東京都武蔵野市【外部講演】
今 世界で起きていることと「食」の未来
意外と知らない 私たちの税金の使われ方

2/8(金)～2/10(日) 東京都千代田区
第18回南北코리아と日本のともだち展
本誌12ページ参照。

2/4(月) 東京都港区
村本さん! 伊勢崎ゼミ生、今日から就活や
めるってよ(仮)
～生きづらさと同調圧力、世界と日本を比べて。
平和構築を学ぶ学生たちによる提言～

2/9(土) JVC東京事務所
イラクカフェ♡パレンタイン企画♡

2/17(日) 東京都台東区【出展】
たいとう地域活動メッセ2019

2/18(月) 東京都千代田区
国連小農宣言・家族農業の10年
今回の国連宣言の採択を受けて、日本の小規模農家の
声を聞く場を設けると共に、政府関係者との政策協
議を実施しました。

2/27(水) 京都府京都市【外部講演】
アーティストブリッジ2019 in 京都
封鎖に抗して ガザ・アーティストは語る

3/2(土) 群馬県太田市【外部講演】
武力によらない平和づくり ～アフガニスタ
ンにおける対話を通じた事例から～

3/8(金)～3/10(日) 大阪府大阪市
第8回 南北코리아と日本のともだち展
inおおさか

3/8(金) 東京都千代田区【外部講演】
平成30年度 多文化 Opinion Exchange
外国人×日本社会 共に支え合う多文化共生
社会を考える

3/9(土) 東京都渋谷区【協賛】
シンポジウム・どう伝える?原発事故のこと
～3・11を忘れない 福島から未来へ

3/21(木) JVC東京事務所
数馬酒造×ソーシャルスタンド×JVCコラボ
日本酒を片手に考える! 日本と世界の持続
的な「食と農」 ～飲んで国際協力!～
石川県の数馬酒造さんがつくっているお酒を飲みま
ながら日本の「食と農」について話し合うイベントです。

3/22(金) 東京都新宿区【外部講演】
すべての壁をぶっ壊せ!
～社会の壁、日本の壁、ワタシの壁～

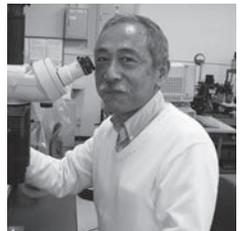
3/27(水) JVC東京事務所
変わりゆくラオスで何をを目指すのか
JVCラオス現地駐在員報告会
ラオス現地代表の岩田の一時帰国に合わせて、ラオス
の農村部の現状とそこのJVCの活動をお伝えしま
した。

3/27(水) 東京都港区
女子大生が見たパレスチナ
～あなたにもできる国際協力～



英語ボランティアチーム
竹村 謙一

知らない世界へ



現役時代は研究に明け暮れる毎日でした。高圧物理学という研究分野で、物質に高い圧力をかけた時に、どのような変化がおきるのかを調べていました。そんな私が、なぜJVCに関わるようになったのでしょうか？

話は今から40年ほど前にさかのぼります。大学院に進学して、これからのような道を歩もうかと考えていました。研究に興味をもっていた一方で、青年海外協力隊にもあこがれていました。未知の国で、現地の人たちとのふれあいを体験できたらどんなにうれしいことだろうと思っていました。でも、最後の一步を踏み出すことができませんでした。

結局、私は大学院を出たあとドイツに留学し、研究者への道をあゆみはじめることになります。最初の4カ月間をドイツ語研修のために語学学校で過ごしました。そこには多くの国の若者たちがドイツ語を習いに来ていました。イタリア、トルコ、インドネシア、フィリピン、イラン、イラク、シエラレオネ、など、誰もがつたないドイツ語でコミュニケーションをとっていました。たぶん、ここでの経験が私の目

を世界に向けさせるきっかけになったのだろーと思えます。

定年退職後、何をやるかと考えた時に、海外協力隊のことが頭をよぎりました。シニアボランティアに応募する道もあつたのですが、国際協力のことを知りたいと思つてJVC事務所を訪ねました。開かれた事務所の雰囲気が入り、迷わず翌年のインターンに応募してアフガニスタン事業インターンとして働きました。現在は英語ボランティアチームの一員としてJVCに関わっています。

思えば、私が無意識のうちに目指していたのは、「知らない世界」だったのかもしれない。研究に没頭できたのも、わからないことを知りたいという欲求からでした。そして今、私にとっての知らない世界、国際協力に入り込んでいます。事務所を行き来する多くの人たちとの出会い、現地の方々の交流、そしてたえず変化する国際情勢、どれもが新鮮で、私にとって未知の世界です。このような機会を提供してくださつたJVCに感謝するとともに、少しでもお役に立てれば幸いです。

おすすめ本

『わが盲想』

モハメド・オマル・アフディン 著
ポプラ社 2013年5月 14000円(税抜)
2018年度パレスチナ事業インターン
勅使河原佳野



今回はJVCの活動地のひとつ、スーダンにゆかりのある一冊をご紹介します。著者はモハメド・オマル・アフディンさん。日本在住歴は20年を超える、盲目のスーダン人です。生まれた時から弱視で、12歳の時に視力を失っています。本書では、アフディンさんの生い立ちから、日本における生活を追っていきます。

スーダンの名門校、ハルツーム大学の法学部生だったアフディンさん。しかしスーダンは政治状況が悪化し、ハルツーム大学は4カ月閉鎖されたまま、再開するめども立っていませんでした。このようにスーダンの状況に絶望していた矢先、知人から「日本留学」という夢のような話を聞きます。視覚障がい者を対象とした、鍼灸を学ぶプログラムの募集が来ていたのです。日本語も日本のこともまったく知らないけれど、こんなチャンスは二度とない。日本留学を決断したアフディンさんは頑固なお父さんを説得し、難関な入学試験を突破します。

たどり着いた先は福井県立盲学校。標準な日本語と福井弁、東洋医

学や西洋医学の専門用語、点字…それまでやってきたのとはまったく異なる内容の勉強が始まります。それだけでなく、お風呂やお酒(アフディンさんはイスラーム教徒など、日本の文化も初めて接するものばかり。目は見えないけれど、その分想像し、挑戦する。このようにしてアフディンさんの日本での大冒険は始まり、福井から茨城、そして東京へと展開していきます。

ちなみに、「日本語はおやじギャグを通して習得した」というアフディンさん。本書でも、例えば第一章のタイトル名「トライ」は渡来と「Try」を掛けています。だから彼の日本語は軽妙で、親しみやすいのだなあと納得です。

目で見たことのない日本を、アフディンさんは見えない世界でどのように想像してきたのでしょうか？彼が体験してきた日本は、私たちとは違つて見えるのかもしれない。皆さんもぜひ、「盲想」の世界をのぞいてみませんか。

お知らせ

第20回 JVC 会員総会のご案内

年に1回、多くの会員の方々と一同に集える場である会員総会を今年も開催いたします。JVCの活動を通して世界各国の課題を共に考える場でもあります。議案書は、別途6月初旬にお送りいたします。

日程：2019年6月15日(土) 10:00~13:00(予定)
場所：台東区 環境ふれあい館ひまわり 第1・2集会室

昨年と会場が異なります。ご注意ください

議案：1) 2018年度活動報告および決算報告
2) 2019年度活動計画および予算案
3) 定款変更

例年と同様、総会終了後の午後に、「会員のつどい」を企画しておりますので、こちらもご参加ください。参加される場合には昼食をご持参ください。

「冬の募金」報告 ※指定寄付/無指定寄付すべてを含みます

2018年「冬の募金」へご協力いただき、ありがとうございました!

11月15日~2月28日集計

1,011件 10,233,264円

募金集計

募金にご協力ありがとうございます。

JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指定先	期間(12~2月)
無指定	14,549,950
タイ	9,000
カンボジア	7,274,900
ラオス	1,834,711
南アフリカ	118,715
アフガニスタン	1,248,174
イラク	67,560
スーダン	68,715
南スーダン	337,515
パレスチナ	1,749,863
コリア	88,200
東日本大震災	691,726
みどり一本	143,946
東京管理	1,500
調査研究	26,915
コンサート	5,356,440
合計	33,567,830円

※上表に「季節の募金(夏/冬/春)」も含まれます。

投稿募集中

JVCや会報誌に関するご意見・ご希望をお寄せください。また、「JVCなひと」への自薦寄稿も大歓迎! JVCの会員になったきっかけや最近の関心事、ほかの会員の皆様へ伝えたいことなど、800字以内でお送りください。

そして、「いまさら聞けないQ&A」でも質問を募集中です。会員になって長いけどそういえば聞いてみたいことがあった、まだ会員になったばかりだから教えてほしいことがある等々、なんでも結構です。

皆様からの投稿をお待ちしております!

【投稿先】 会員担当 横山まで
Email: yokoyama@ngo-jvc.net
FAX: 03-3835-0519

人事

入職



渡辺 真帆

エルサレム事務所現地駐在員(11月19日付)
大学時代のパレスチナ留学で豊かな自然や文化、占領下でしなやかに生きる人々に出会い、卒業後は通訳・翻訳者としてジャーナリズムや芸術に関わる。JVCには2015年度インターンから参加。ポルダリング初心者です。

異動

横山 和夫 会員・支援者担当
(南相馬事業担当より: 4月1日付)

大澤 みずほ エルサレム事務所現地駐在員
(パレスチナ事業担当より: 2月22日付)

渡辺 真帆 パレスチナ事業担当
(エルサレム事務所現地駐在員より: 2月22日付)

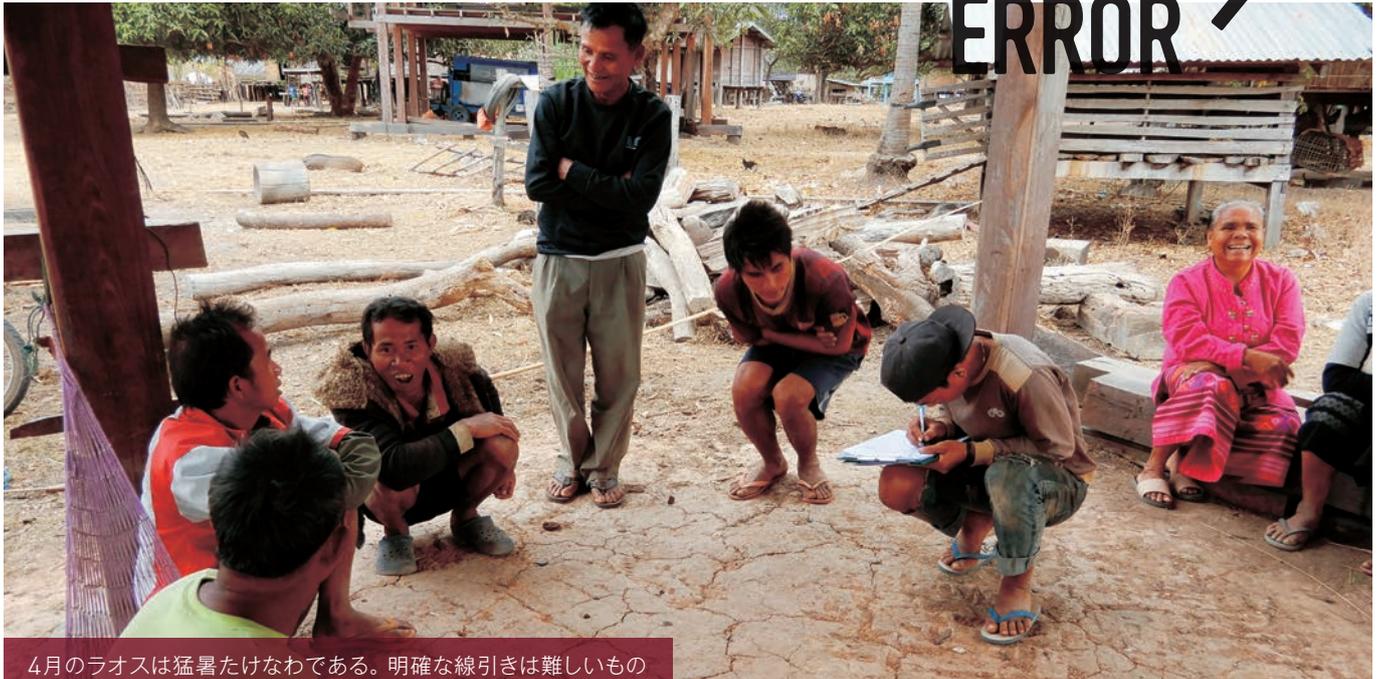
退職

石川 朋子 コンサート事務局(3月31日付)

小野山 亮 アフガニスタン事業統括(3月31日付)

編集後記

これまで、広報/FRグループマネージャー、会員・支援者担当、コリア事業担当、と3足のわらじを履いておりましたが、マネージャーは元パレスチナ事業担当の並木へ、会員・支援者担当は元南相馬事業担当の横山へ交代することとなりました。とはいえ、引き続き、コリア事業担当として一生懸命活動してまいりますので、会員総会でみなさまとお会いできるのを楽しみにしております。今後ともよろしく願います! (宮)



4月のラオスは猛暑たけなわである。明確な線引きは難しいものの、ラオスの乾季はおおよそ11～5月、雨季は6～10月だ。5月になると、まるで思い出したかのように雨が降り出し、だんだんとその回数と量を増していく。年間降雨量1,400mmの大半はこの約半年間に集中して降り、人々は農業に精を出す。（上の写真は11月、乾ききった地面の上で家庭菜園のための会議をしているゲンサイ村の人たち。下は雨季の風景。）



日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉をも、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数（4月1日現在） 合計926名（正会員522名 賛助会員404名）

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の横山まで。

メールアドレス yokoyama@ngo-jvc.net

- 一般会員 10,000円
- 学生会員 5,000円
- 団体会員 30,000円

それぞれに正会員と賛助会員があります

JVCのオリエンテーション（説明会）にお越しください

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。[事前にご予約ください]

会場 JVC東京事務所 参加費 無料

第1月曜日 午後7:00～8:30
第4土曜日 午後2:00～3:30

ウェブサイト <https://www.ngo-jvc.net/>

メールアドレス info@ngo-jvc.net

Facebook [NGOJVC](https://www.facebook.com/NGOJVC)

Twitter [@ngo_jvc](https://twitter.com/ngo_jvc)

◎発行人 = 日本国際ボランティアセンター（JVC） 〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4 クリエイトPOne秋葉原ビル6F TEL 03-3834-2388 FAX 03-3835-0519

◎発行人 = 今井高樹 ◎編集人 = 大野和興・長谷部貴俊 ◎編集スタッフ = 榎田秀樹・細野純也

◎デザイン = 渡部健 ◎印刷 = 株式会社ベスト・プリンティング

本誌の記事・写真などの無断転載・複写を禁じます。

FSC認証ロゴ位置